

発行/モザイク会議 議長 情野良夫 tel:042-3629-4162

モザイク会議事務局：〒185-0012 東京都国分寺市本町 4-12-4 司アートシティ 104

モザイク会議ホームページ：http://www.maa-jp.com/ Email:maaj@maa-jp.com

編集/作成：モザイク会議運営委員会

モザイク展2016ー絵本

オリエアートギャラリー

6月20日～25日

出品者数 23名

出品集 30点

来場者数 150名

「モザイクと絵本の交錯する場所」

美術ジャーナリスト・村田真

BankART スクール校長。

ネットの Artscape で展覧会のレビューを書いています。



最初「モザイク展」のテーマが「絵本」と聞いて違和感を覚えた。モザイクのどこから絵本が発想されるのだろう。

モザイクも絵本も「絵」であることは共通しているけど、厚くて重くて硬いモザイクと、薄くて軽くて滑らかな絵本

はまるで違う。正反対といってもいい。いったいどうやってモザイクで絵本を表現するというのか。

そこで出品作家のひとり喜井豊治さんに、なぜ「絵本」なのか聞いてみた。答えは明快、「モザイクから違いものだから」。

モザイクで表現しやすいテーマを出してもありきたりの作品しか出てこない。どうせなら挑戦しがらみのある

テーマにして、モザイクの可能性を引き出したい……とおおむねそのような話だった。

これを聞いて、目の前が少し開けた。以前にも述べたことだが、もともとモザイクは建物に付随する「不動産美術」

であり、中世までプレスコ画とともに美術の主流を占めていた。ところがルネサンス期に持ち運び可能な油絵が普及

すると、モザイク画は廃れてしまう。つまり不動産美術が不動産美術に取って代わる……というのが私の持論なのだが、

このとき増っしてしまった部分がある。実は不動産美術が主流の時代（つまりルネサンス以前）にも不動産美術はある

にはあった。その代表的なものが彩飾写本、平たくいえば「絵本」なのだ。だから私の脳の一隅では、モザイクと絵

本は同じ美術コーナーながら反対側に分類されていたのであり、最初に感じた違和感もこれが原因だったと気がついた。

であるならば、作品の見方（評価軸）もおのずと決まってくる。ただ単に絵本のかたちを表面的に模しただけではお

もしろくない。そうではなく、ほとんど交わることもなかったモザイク文化と、彩飾写本に選ばれる絵本文化を、いかに

交錯させるのか、そこが焦点になってくるはずだ。そういう視点でながめてみて、もっとも興味を惹かされたのが、ヴェネ

ツィアの街並を地図のように表現した岩田英雅の《タイルの街「水の都」》だ。

ヴェネツィアといえばサンマルコ寺院のモザイク画が有名だが、

一方で、海上都市のため塩分に弱いプレスコ画が廃れ、代わ

りに油絵がイタリアでいち早く発達した都市でもある。また同時

期に、彩飾写本に変わって印刷術を採り入れ、印刷・出版

業でヨーロッパの中心になった街でもある。その意味でヴェネ

ツィアは、モザイクと絵本の接点に位置する都市であると同

時に、不動産美術から不動産美術へと転換した歴史を刻む場所

もあるのだ。

作者がこうしたことにどれだけ自覚的かは知らないけれど、

そうした読み方を許容する点で懐の深い作品というべきだろう。



岩田英雅

モザイク展 2016「絵本」へのコメント

アトリエトド 松井正澄



この春にモザイク会議の小田さんから、「絵本」という共通のテーマで作品を制作する展覧会を開催するのでコメントを書くように、とのご案内をいただきました。自分の力量不足は承知していますが、おもしろい企画なので引き受けました。

展覧会が近づくにつれ、モザイク作家は「絵本」をどのように解釈し構想を練り、表現するのが気になってきた。ところで「絵本」とはナンだろう。図書館のこどもコーナーに行けば、たくさんの「絵本」に出会える。大雑把に言えば「絵本」は、物語と絵が描かれた項が綴られたものだ。作家は、多くの物語を生み出し「絵本」というカタチ・形式を借りて様々な表現を試みてきた。「絵本」を開けば、物語は瞬く間にこどもの想像の翼を開かせて、現在過去未来世界の何処へでも連れて行ってくれる。こどもや大好きな動物たちや身近なモノ達が主人公になり、魂の冒険を繰り広げる。絵は物語の世界観にイメージを与え、広げ、視覚に着地点を与える。絵は決して見ることでできない何かを、誰もが見える姿で描くことによって伝える。綴じられる本のカタチ・形式は、物語や絵に時間と場所を与える。項をめくる行為が、過去・現在・未来の時の移ろいと、ここ、そこ、どこも場所をしめす。移動-飛翔や転換、逆行も思いのままだ。「絵本」を見る喜びは、知る喜び。この世や物事の成り立ち、知識や知恵、不思議と秘密、愛や希望、冒険、慈悲、欲望、美しさや醜さ、喜びと悲しみ、成功と失敗、生と死、平和と戦い。「絵本」を読み終えたこどもには、知ることと同時に心に何かが芽生えてくる。淡く儚いものだが大切な何かにつながっている・・・。「絵本」にはそんな力と可能性が秘められていると思う。

「絵本」をテーマに、モザイク作家はどんな試みをするのだろうか。

まず、どのような物語を創造するのだろうか。

次に、物語の世界を石やガラスや様々なテッセラでどのように表現するのだろうか。

そして、「絵本」のカタチ・形式は、モザイク作品にどのように取り込まれるのか。

作家の個性や作風は、どのように展開されるのだろうか。

展覧会の開催が楽しみになりました。



今野栄子



石内淳吉



馬淵絵子



橋村元弘



会場風景

以下はモザイク会議のファンである私の勝手に生意気なコメントです。

敬称は略させていただきます。

※

2016年6月20日 オリエアート・ギャラリーにて

宮内厚吉は自信のフレスコ画の個性では重厚感のある本を作品にしてきた。「月と犬」は、美しいモザイクのコラージュ作品だが、星空→犬のいる大地→夜空の月へと視点の移動が感じられて、空気感が漂う「絵本」がうまれた。木の厚みが画面の奥行きと物語の後光をほのめかしている。丹念な作業から生み出される安定感と涼感を兼ね備えた宮内らしいモザイク作品となっている。

小田いこの「芽吹き 花が咲き やがて実りの季節 そして静かに春を待つのです」は四季を「絵本」の右つ時間性と枠組みで表現している。「食べたのは誰？」は「絵本」自体が絵となりこどもを引き寄せる。

松尾比佐夫は、「絵本」というテーマに対しては、兎に角ページがあればよいと思ったという。くりぬいた紙管をボルトでつなぎ合わせて基った塗装をした基盤上に2つの作品を制作した。これは「絵本」の形式を借用しているようで実は、「掛け軸」なのだという。確かに掛け軸にも絵と文字がある。森鴎外の小編「寒山拾得」に出てくる言葉タイトルにした「さては善干がしゃべったな」は、松尾自身と三上さん、三上さんの孫の写真をモザイクで表現したほのぼのとしたポートレート。誰もが知っている物語「letter from goat」とともに、気負いの無い又ひびびとした表現となっている。松尾の暖を感じさせる作品。

モダニスト・橋村元弘の両面モザイク作品をピアノ光前で観じた「絵本」仕立ての「わがはいはネコである」は、ユーモアと明るさや軽さのある現代「絵本」そのものだ。モザイクの色彩の鮮やかさや線のゆがみ。大人が楽しめる「絵本」だ。戸栗裕子「・・・」も、「絵本」の形式にこだわった素材感のある触りたくなる作品。

若田英穂のタイルの衝「水の都」は、物語と作品がセットになって成立する「絵本」。

長谷川八重子は「絵本」から物語を排除して、「万華鏡」並べるでも美しい幾何学的な表現を貫いている。「絵本には読み取るものは何物もない、ただ見られるべきものが存在するだけ」と言っているようだ。

今野秀子は「絵本」のカタチ・形式にこだわっていない。「キャロルの夢・サロ・オ」の首飾りの夢より」と「閑遠世界・カカカカ魔法の旅より」は、イギリスのファンタジー作家ダイアナ・ウィン・ジョーンズの世界観を立体的なモザイクで表現した作品。永遠の時尚の中で主人公の登場を静かに待っている不遜の場所のようだ。

橋井貴知子の「もくもく」は、「絵本」世界から抜け出した主人公か？ 今野作品同様に、「絵本」のカタチ・形式から脱して、狂物の存在感のある作品。

張 来希の「嵐の中でのダンス」はテッセラの赤が、情熱的でミステリアスな物語の始まりを予感させるようだ・・・。

櫻井拓也は赤と白が印象的な作品「Don't think, sink」で実験的な試みをしている。モザイクの目地がむしろ主役となって、「絵本」の絵と地というよりは、タイポグラフィーの文字と地の関係に近い作品。

熊淵聡子「死者の言」は、古代エジプトで冥福を祈り死者とともに埋葬された葬祭文書がモチーフ。文字と絵が一体となり、本の扉であり「絵本」そのものでもある作品。

喜井登治の白いモザイク作品「ここに村があった」は、「創造には破壊が伴う。破壊なくして創造は無い。創造物は時間の前にはすべて廃墟へと移行する。」というメッセージから生まれたディストラクション・コンストラクションシリーズの一つだという。「絵本」の左右の頁の厚みの違いで廃墟への時間の流れを表す。廃墟と化していく村の姿は、創造と破壊がモザイクのレイヤーの重なりで表現されている。喜井の作品は、現実の世界を探索しモザイク世界に互換する永遠の行為とも見えるが、そこに作品のシェイプを見いだすことは難しいと思う。「絵本」というテーマがそうさせたのか、この作品では珍しく世界の外側を矩形としている。

※

モザイク展2016「絵本」は、モザイクによる様々な「絵本」の表現と、「絵本」の可能性に出会える楽しい観覧会でした。共通のテーマがあることで、それぞれの個性が際立ち、作家自身も楽しめた展覧会だと思います。

展覧会会場では、皆さんのモザイク作品への様々な思いを熱く丁寧にお聴きいただき、ありがとうございました。

2016年7月19日





































ズマルトの在庫リスト

ズマルトはまだあります。

希望者は岩田英雅のところへ葉書あるいはファックスで連絡ください。

1グラム1円です。会員以外の方は会員経由で注文を受け付けます。

岩田英雅 〒250-0001 小田原市扇町 1-46-38 Fax0465-30-1304

色番	色	在庫量	色番	色	在庫量
2230		500 g	2660		10000 g
2330		10750 g	2680		11250 g
2340		2000 g	2690		500 g
2350		1500 g	2740		750 g
2360		2000 g	2790		2000 g
2370		1000 g	2800		11000 g
2390		2000 g	2810		2250 g
2440		2250 g	2820		2000 g
2450		2000 g	2830		5000 g
2490		2000 g	2850		2000 g
2510		6000 g	2910		8000 g
2530		5500 g	2920		250 g
2550		12000 g	2930		4000 g
2560		2000 g	2940		23250 g
2580		2000 g	2960		3500 g
2600		10000 g	2960		25000 g
2640		2000 g	2980		4750 g
2650		8000 g	3000		6250 g

多治見陶磁器フェスティバルへの参加を検討中！！

来年 2017 年 9 月、多治見市で 3 年に一度の陶磁器フェスティバルが開催されます。

モザイク会議もその関連イベントに参加する案が出ています。

タイルを使ったオブジェ案を運営委員会では考えています。

具体性が出てきたら、会員の意見を聞く機会を設けようと考えています。

年会費 12000 円未納の方が数人います。

以下への振り込みよろしくお願いたします。

年会費およびズマルト代金はこちらへお願いします。

ゆうちょ銀行 振替口座：記号 10000 番号 97185511 名義：モザイクカイギ